

## まちづくりにおける猥雑なものの再検討

——ニュー道後ミュージックにおける地元アーティストとの協働を事例にして——

A Reconsideration of Vulgarities for Place Making:

A Case of Collaboration between “New Dogo Music” and Local Artists

西田さき（法文学部学生）・山口信夫（社会共創学部）

NISHIDA Saki and YAMAGUCHI Nobuo

### 1. はじめに

観光論におけるオーソドックスな議論は、女性客やファミリー層を中心とする個人客向けのまちづくりに特色づけられる由布院（大分県由布市）を、持続可能な観光振興のモデルとして持ち上げる一方、別府（大分県別府市）や熱海（静岡県熱海市）に代表される、大型リゾートホテルや猥雑な歓楽街で団体旅行客を集めてきたまちを、かならずしも肯定的には評価してこなかった（猪爪, 1992: 367 頁; 浦, 2013: 3 頁; 船本, 2014: 87 頁）<sup>1</sup>。参考までに、別府のまちを散策中の観光客に対して、「中心市街地周辺のスナック・バー・風俗店等が集まるエリアをどう思うか」と筆者（西田）が質問してみたところ、「せっかく温泉があるのにもったいない」（60代男女）、「家族連れが歩みにくいので無い方がいい」（40代男女5人組）といった評価が得られ（調査日時：2018年12月8日）、未だなお、猥雑さに対するマイナスイメージが強いことを確認できる。

ところが近年、とりわけ20～30代を中心とする若者の間に、別府や熱海のように猥雑さを包摂したまちをむしろ積極的に評価する動きも広がっている。たとえば、旅行情報サイト「LINE トラベル.jp」は個性的なバー・スナックや飲食店の集積する大阪の「裏なんば」を<sup>2</sup>、また、若い女性をターゲットとするウェブメディア「女子SPA!」は熱海に位置する成人向けの集客施設「熱海秘宝館」を<sup>3</sup>、女性にもおすすめの観光スポットとして紹介している。かつて男性客を中心に賑わっていた歓

楽街が、むしろ若い女性向けにプッシュされているのである。また、若者に人気の SNS である Instagram でも、「#ノスタルジック」、「#ディープスポット」といったハッシュタグの付いた投稿を検索すると、古い居酒屋やスナックなどの看板が所狭しと並ぶ一見怪しげな路地や、電線が交差する裏通りなどの写真が、人気投稿としてトップに表示される。こうした投稿からも、まちの猥雑さを魅力として捉える消費者は少なくないことが分かる。このように多様な価値観が生まれつつある今、猥雑性を排した雑味のないまちばかりが理想の姿としてもはやされる時代は終わりつつあるのではないだろうか。一見まちの恥部とも捉えられかねない猥雑性が地域資源として再評価されつつあることは、新しい時代のまちづくりを考えるうえで注目すべき現象といえよう。

では、上述のように猥雑なものが再評価される背景にはどういった事情があるのだろうか。第1に、スナック、ストリップ劇場、成人映画館といった成人向け娯楽施設の絶対数が減少していることを挙げておきたい。これらの施設が、稀少性を帯びることによって、逆に、人の目を惹きつける物珍しさを生み出している可能性がある。また、第2に、消費者たちの間でレトロなものへの関心が高まっている点も重要であろう。結果として、成人向け娯楽施設も、「昭和の雰囲気を残す味わい深い場所」として若者たちに受容されつつある。そして、第3に、成人向け娯楽施設の側も、生き残りを賭けて、イメージ転換のための取り組みに

力を入れ始めている。というのも、マス・ツーリズムがかつてほどの勢いを失い、とりわけ温泉観光地の歓楽街では、従来のように団体旅行客を呼び込むことが難しくなってきたからである。そうした地域の成人向け娯楽施設の中には、若い女性も含めた、新しい客層の開拓に注力するところも存在する。たとえば、アートや音楽の要素を取り込み、従来とは違った意味付けの場所をつくりあげていく取り組みなどは、こうした意味での客層開拓の事例といえるであろう。

本研究の最終的な目標は、猥雑なまち<sup>4</sup>を積極的に評価することのできるまちづくり理論の構築である。とはいえ、この検討課題を全面的に追究する作業は、現時点での筆者らの力量をはるかに超えている。そこで本稿では、近年、若者たちの間で猥雑なものが積極的に評価されるようになった経緯について、事例に即して確認することを直接的な目的としたい。とくに上述した論点の内の3つめ、つまり、成人向け娯楽施設の方からの歩み寄りに焦点をあてることにし、具体事例として、四国有数の温泉観光地・道後のストリップ劇場「ニュー道後ミュージック」が地元アーティストと共同で実施している「コラボストリップ」の取り組みを取り上げる。

本稿では、以下、次のような順序で議論を進める。第2節では、観光を絡めたまちづくりに関する議論の中で、猥雑なまちに対する評価がどのように変遷してきたのかを概観する。第3節では、「ニュー道後ミュージック」における「コラボストリップ」の実践者たちにヒアリング調査を実施し、イベント成立の経緯や、その継続要因について整理する。最後に第4節では、本稿の到達点と課題を整理して、議論の締めくくりとしたい。

## 2. 猥雑なまちに対する評価の変遷

### 2-1. 成功例とみなされてきた「由布院的」なまちづくり

1960年代前半から1970年代前半にかけて、日本はマス・ツーリズムの時代を迎えた。1964年に

開催された東京オリンピック、高速道路や新幹線の開業、日本人の海外旅行自由化などが大きな転換点となったといわれている(梅川, 2009: 70頁)。こうした戦後の経済発展により、それまで富裕層に限られていたレジャーのひとつである「観光」が大衆化し、日常生活の一部として定着した。当時は団体旅行が主流であり、おもに職場や学校を単位とする団体観光が盛んにおこなわれた。こうした団体客をターゲットとして発展したのが大規模温泉地であり、麦屋(2004)は当時の状況について次のように述べている。

戦後の荒廃、食糧難の時代から、朝鮮戦争、高度経済成長期にかけて、都市住民を中心に一夜の享楽を求めて人々は温泉地へと集まり、温泉地は盛り場的な色彩を強め、一泊二日宴会型の宿泊観光地となる。この時代から、社内慰安旅行、企業の招待旅行などの団体旅行が活発化して、温泉地の旅館・ホテルの対応も変容し始めた。

(麦屋, 2004: 52頁)

こうした大規模温泉地を代表するのが熱海や別府であり、当時は「東の熱海、西の別府」と称されるほど人気の観光地であった(山崎ほか, 2010: 267頁)。

しかし、バブル崩壊を境に人々の旅行形態が大きく変化し始める。主流の観光スタイルが団体型から個人・グループ型へと移行し、観光目的が多様化したのである。原(2004)は、旅行形態の変化・観光目的の多様化について次のように述べている。「国民大衆が旅行慣れしてきた過程は、一般的に『みる』観光——周遊型観光旅行や慰安型団体旅行などから、スポーツ旅行や体験旅行など『する』観光が加わり、さらに保養や休養、避暑や避寒などの『滞在型の旅行』など幅広くなってきていることである」(原, 2004: 9頁)。そして、こうした変化の影響を強く受けたのが、これまで大規模旅館と歓楽街に支えられてきた温泉地であ

った。それらの多くは時代の変化に対応できず、衰退していくこととなった。

こうしてマス・ツーリズムが徐々に退潮していくのに伴い、新たな温泉地のあり方を模索する動きが全国各地に広がった。中でも、新たなニーズに応える形で人々の人気を集めたのが保養型の観光温泉地であり、その代表例は由布院である。由布院は、歓楽街化や旅館の大規模化に慎重な態度を貫き、行き過ぎたりゾート開発を抑制する方向性のまちづくりを推進した。さらに、「ゆふいん音楽祭」、「牛喰い絶叫大会」、「湯布院映画祭」などのイベント開催にも力を入れ、女性客を中心に日帰りを含めて年間約400万人の観光客を集めた(木谷, 2004: 108頁; 麦屋, 2004: 57頁)。こうして由布院は、大規模な宿泊施設と歓楽街に頼りきった温泉地とは一線を画す地位を確立したのである。

そして、マス・ツーリズムに照準を合わせたまちづくりが見直されるにつれ、全国各地の観光関係者や研究者たちの間で、由布院のようなまちこそまちづくりのお手本とみなす認識が一般的になった。また、大規模旅館と猥雑な歓楽街で発展してきた別府や熱海が、時代の変化に取り残された観光地として、否定的な文脈で議論されることも多くなった。

たとえば猪爪(1992)は、「大分県湯布院町は日本有数の別府温泉を『反面教師』とみなしながら、山間の小さなまちの利点を生かして、『住んでよく、訪ねてもよいまち』をつくる挑戦を続けてきた」(367頁)と議論している。また、浦(2013: 3頁)も、「旧来型の温泉地」と「秘湯・癒し系の温泉地」の間で観光地の明暗が分かれていると指摘したうえで、由布院のまちづくりを次のように評価している。「由布院の活性化以降、温泉地の再生や地域活性化に取り組む温泉地が各地で登場している。それまでの温泉地は『旅館づくり』はあっても、『まちづくり』は無かったと揶揄されている」(3頁)。

## 2-2. 猥雑なまちを評価する価値観の拡がり

注4でも示したように、本稿で用いるところの「猥雑なまち」とは、居酒屋、バーといった飲食店に加えて、スナック、ストリップ劇場、風俗店などのような成人向け娯楽店が入り混じるエリアのことである。類似する概念として「盛り場」(寺谷, 2003)<sup>5</sup>、「官能都市(センシュアス・シティ)」(島原, 2015)<sup>6</sup>などを挙げるができるが、風俗店などのように、イメージだけで排除の対象とみなされがちなものが含まれていることを明確に示すためには、独自の概念を提示して議論を進めることが望ましいと考えた。

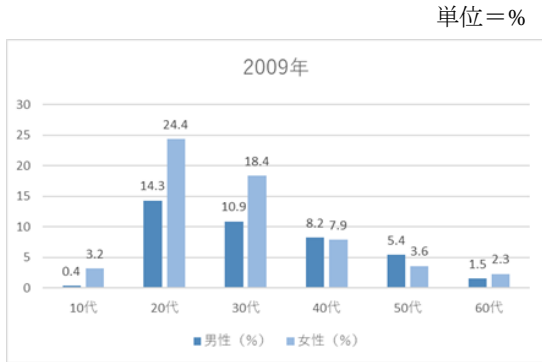
第1節でも触れたように、近年若い世代を中心に、猥雑なまちを肯定的に捉える価値観が広がっている。たとえば、若者向けの旅行情報サイト「LINEトラベル.jp」(2017年4月20日)には、居酒屋や個性的なバー・スナックなどの飲食店が雑多に集まる大阪の飲み屋街「裏なんば」について、肯定的な文脈での紹介がある<sup>7</sup>。さらに、トレンド情報サイト「女子SPA!」(2016年2月8日)でも、成人用の玩具を展示している「熱海秘宝館」が肯定的に紹介されている<sup>8</sup>。

なお、熱海は、近年のまちづくり活動により、かつての衰退温泉地のイメージを払拭することに成功しつつある。市木(2018: 62-70頁)によると、熱海における近年のまちづくり活動は、地域外からの観光客だけでなく地域住民に対しても、地域の魅力を発信しようという取り組みから始まった。具体的には、「あたみナビ」<sup>9</sup>という情報発信の取り組みや、「チーム里庭」<sup>10</sup>の設立などがそれにあたる。2009年からは地域住民を対象としたツアーイベント「熱海温泉玉手箱」(通称: オンたま)が開催され<sup>11</sup>、中でもとくに、まちなかを歩きながら古い喫茶店を巡る「裏路地昭和レトロ散歩」は好評であったという。参加者の7割は女性であり、イベントを機にロコミが拡がり、女性向け雑誌に「熱海のレトロかわいい喫茶店」として特集を組まれるまでになった。そして2012年には熱海を中心市街地活性化を目的とした株式会社「machimori」

が設立され、遊休物件のリノベーションが活発化した。以降、熱海では、カフェやゲストハウス、コワーキングスペースなど、次々に新しいプロジ

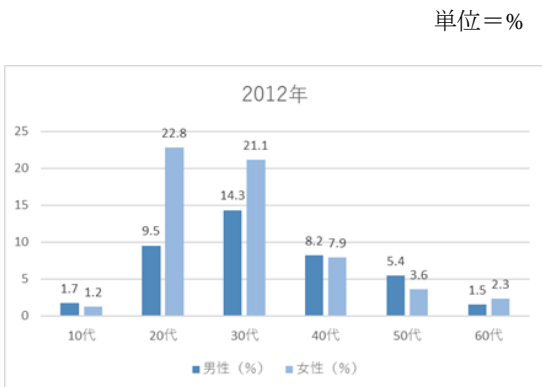
ェクトが誕生している。こうして、熱海は若い世代や女性に人気の観光地として再評価されるようになったのである。

図表 1：混浴温泉世界の性別・年齢別来場者数——2009年



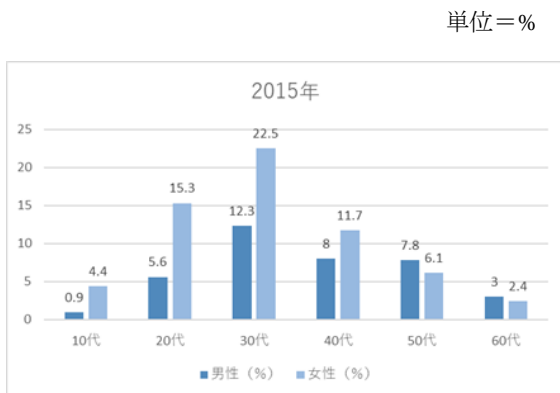
出所 山出淳也さん提供の資料による

図表 2：混浴温泉世界の性別・年齢別来場者数——2012年



出所 山出淳也さん提供の資料による

図表 3：混浴温泉世界の性別・年齢別来場者数——2015年



出所 山出淳也さん提供の資料による

また、別府も、アートプロジェクトを中心とした様々な取り組みにより、近年、熱海と同様に若い世代の注目を集めている。別府のアートプロジェクトを語るうえで無視できないのは、NPO 法人 BEPPU PROJECT (2005年設立) の活動である。BEPPU PROJECT は、様々なアートイベントの開催を通して、地域にアートを紹介する活動からスタートし、2009年には、別府市で初めての大規模な芸術祭「混浴温泉世界」を開催するなど、アートをまちに定着させ、地域の活性化に繋げる取り組みに注力してきた。BEPPU PROJECT の主催するアートプロジェクトは、風俗店のすぐ横にある神社で芸術作品が展示されたり、きわどい内容のイベントが含まれていたりするにもかかわらず、若い世代の女性客を中心に人気を集めている。たとえば、BEPPU PROJECT として初めてのイベントとなった「劇団 指輪ホテル」の公演は、胸にベールを当て透明のビニールで出来たドレスのみを身に纏った若い女性がパフォーマンスをおこなうという挑戦的な内容であったが、女性客も含めて多くの観客が集まり、大盛況であったという。実際、2009年・2012年・2015年のデータを見る限り、混浴温泉世界の主要客層は20代から30代の女性である(山出, 2018: 246頁)(図表1, 2, 3を参照のこと)。

このように若い世代を中心に、新たな価値観が拡がりつつある今、猥雑なものを安易に排除するのではなく、包摂していくまちづくりについても、真剣に議論すべき時期が到来している。

### 2-3. 猥雑なものを再評価するまちづくりの難しさ

しかしながら、猥雑性を包摂したまちづくりがあらゆるまちにおいて推進可能かという点、疑問符もつく。そうした方向性のまちづくりは、一定数以上の住民に支持されて初めて、推進可能とい

えるからである。実際、猥雑なものに対して寛容な価値観を持つ人はまだなお少数派であり、そうしたものを取り込むまちづくりに対する拒否反応は大きいものと推察される。

たとえば1955年4月18日の朝日新聞では、別府や熱海を修学旅行の目的地とすることは教育上の観点からのぞましくない、とする見解が紹介されている。とくに別府については、次のようなエピソードが紹介されている。

別府は余りにも誘惑の手が多すぎるともいえる。おみやげにエロ細工を買って帰ったという学生もあり、商売女が旅行に来た高校生を招く夜景もみられる。飲食店に囲まれた旅館が多いのでこっそり夜遊びしたという話もある。旅館街の派出所に勤務している若い別府署員は「責任は引率の教員にありますね。旅行に来たという解放感から、教員がまっ先にだらしなくなり、夜の監督もせずに酒を飲み回っている」といっている。

(『朝日新聞』1955年4月18日朝刊第7面)

こうしたエピソードからもわかるように、猥雑なまちは、教育的観点ないし環境浄化主義的観点から否定的な扱いを受けることが少なくない。そして、大抵の場合、そうしたエリアは当然のように排除すべき存在とみなされ、再開発や浄化政策の対象地域に指定されがちである。

たとえば、東京都品川区武蔵小山駅周辺一帯に存在していた武蔵小山飲食店街「りゅえる」もその1つである(島原, 2015: 6頁)。フランス語で「小路」を意味する「りゅえる」という名称は2012年に新しく名づけられたらしく、年配者を中心とした地元民からは親しみを込めて「暗黒街」と呼ばれていた。暗黒街という愛称は、この地域が戦後に発展したヤミ市であったことが関係している。その名残もあって、狭い路地には低価格な立ち飲み屋やエスニック料理店、バー、スナックなどが集まり、まさに猥雑なエリアが形成されていた。

しかし、2014年に計画が決定された武蔵小山パルム駅前地区第一種市街地再開発事業において暗黒街は再開発の対象エリアとなり<sup>12</sup>、2015年には多くの店が立ち退きを強いられることとなった。

ちなみに、猥雑なまちの浄化運動が最も顕著な形で推進された事例として、横浜市中区の黄金町がある。樋口(2012: 80-86頁)によれば、黄金町は、戦後間もない頃から、違法風俗店の集積地として知られていた。環境浄化政策の必要性が認識されるに至った経緯として重要なのは、1995年に実施された京浜急行電鉄の高架の耐震補強工事である。この工事によって、立ち退きを強いられた風俗店の拡散と乱立が一層進展し、ピーク時にはエリア全体で約260店舗にまで数を増やしたという。こうした状況を問題視した地元企業・商店主・住民たちは、「初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会」を発足させ(2003年)、アートを用いた猥雑なまちの浄化作戦を強力に推進したのである。こうして、違法風俗店の看板の撤去運動や、アーティストの活動拠点となるスタジオ整備が進められ、2008年には第1回目のアートイベント「黄金町バザール」が開催された。以降、「黄金町バザール」は、年1回の恒例イベントとなっている。

ところで、黄金町の事例に対しては、アートの名を借りたジェントリフィケーション<sup>13</sup>ではないかとの批判もある。笹島(2011: 80頁)によれば、浄化活動を進めてきた側にも、黄金町のまちづくりにはジェントリフィケーション的側面があったと自覚する者がいるという。しかし、笹島は、黄金町のまちづくりを批判的に捉えつつも、他方で、「集約的・管理的手法でなければ、いちごっこの続いてきた不法活動を取り除くことはできなかった」(笹島, 2011: 80頁)と、一定の理解も表明している。このことから、猥雑なもの向き合うまちづくりの難しさがうかがえる。

ここまでみてきたように、猥雑なものを包摂するまちづくりについて検討することの意義は大きくなっているものの、猥雑性に対して拒否反応を示す住民もまだなお多い。したがって、猥雑性を

活かしたまちづくりの拙速な推進には慎重さも求められている。また、猥雑なものを提供する側にも、周囲からのイメージを好転させるための努力が求められているように思われる。

### 3. ニュー道後ミュージックにおけるコラボストリップ

上記のような観点から、本節では、近年、若者たちの間で猥雑なものが積極的に評価されるようになった経緯について、成人向け娯楽施設の側からの歩み寄りに焦点を当てつつ、明らかにしていく。具体的にいえば、四国有数の温泉観光地・道後のストリップ劇場「ニュー道後ミュージック」におけるコラボストリップの取り組みを事例として取り上げる。調査の概要については、項を改めて説明することにしたい。

#### 3-1. 調査の概要

まず、なぜ他のタイプの性風俗店やスナック・バーといった業態でなく、ストリップ劇場に注目するのかについて、簡単に説明しておきたい。ストリップ劇場は、猥雑なまちに立地する業態の中でも、ひととき強い向かい風に直面している。そこでは、踊り子（ストリッパー）と客の間に身体的接触が生じない。したがって、サービス提供者との身体的接触をのぞむ客であれば、より本格的な性風俗を選好する可能性が高い。また、女性の裸を見たいだけの客は、インターネットなどの情報媒体を用いてはるかに安価に目的を達成してしまうかもしれない。その意味において、ストリップ劇場は、類似の性風俗店にも増して、経営的に苦戦している。つまり、ストリップ業界にとって、新たな客層の取り込みは、類似する他の業態にもまして切実な課題といえる。

本節で事例として取り上げるニュー道後ミュージックでも、近年、踊り子と地元アーティストの協働による「コラボストリップ」の取り組みを続けている。そこで本節では、イベントの関係者たちにヒアリング調査をおこない、イベント成立の

経緯、イベントが継続する要因などを明らかにすることにした。

ヒアリング対象者は以下の7名である。木村晃一郎さんはニュー道後ミュージックの現社長である。白石伸吾さん・吉井和美さんは、愛媛県を活動拠点とするハワイアンバンド the Blue Lagoon Stompers のメンバーであり、リーダーである白石さんは主にギターを、吉井さんは主にボーカルを担当している。なお、白石さんは、ニュー道後ミュージックでのコラボイベントやアートイベントの企画の多くを手掛けている。牧瀬茜さんは、踊り子（ストリッパー）として活動しながら、芝居や作家活動にも力を入れている。画家・ダルマ作家の富久千愛里さんは、子育てをしながらライブイベントやイラスト制作などの表現活動にも力を入れている。道後のまちとは関わりが深く、「富久だるま道場」という屋号で道後の土産物のダルマ制作にも力を入れている。中ムラサトコさんはボイスパフォーマーとして活動する音楽家である。2012年に松山市三津地区に移住して以降、現在も同地区を拠点として活動を続けている。仙九郎さんは、様々な民族楽器を使用して音楽活動を実践するアーティストである。

#### 3-2. ニュー道後ミュージックの概要

ニュー道後ミュージックは、愛媛県松山市の温泉観光地である道後地区で営業を続けてきた。元々は「道後ミュージック」という名称で、温泉街を訪れる団体観光客を主要な客層としてきた。しかし、前経営者が体調の悪化や資金繰りの問題で営業から手を引かざるをえなくなり、元々ストリップ劇場での勤務経験を有していた木村さんが、2006年に劇場を借金ごと買い取るようになった。木村さんが劇場を継ぐことにしたのは、四国に残る唯一のストリップ劇場がなくなってしまうのはもったいないとの思いからであるという。以降、名称を「ニュー道後ミュージック」に変更して営業を継続している（木村さんへのヒアリングによる）。

ニュー道後ミュージックでは、各回入れ替え制の公演を1日に4回実施している<sup>14</sup>。通常、1回あたりの出演者は2~3名である。なお、劇場のスタッフは、社長の木村さんと音響・照明担当のスタッフだけである。踊り子は、ニュー道後ミュージック専属というわけではなく、全国各地のストリップ劇場を行脚するスタイルが一般的である。

また、後述するように、ニュー道後ミュージックでは、不定期ながら、2013年頃より、音楽・ライブペインティングなどのパフォーマーと踊り子とのコラボイベント（コラボストリップ）を実施してきた。直近年では、このイベントが定着し始め、従来型のストリップファンだけでなく、若い女性客も含めた新たな客層からも注目を集めつつある。

### 3-3. 開始の経緯

ピンク街・風俗街に対する需要の減少は、コラボストリップを必要視するに至った大きな問題意識であったという（木村さんへのヒアリングによる）。3-1でも触れたように、マス・ツーリズムの退潮、それに伴う団体旅行客の減少、インターネットの普及などは、ストリップ劇場の存立基盤を削ってきた主要な要因といえる。

さらに、風営法（風俗営業等の規制及び業務の適性化等に関する法律）<sup>15</sup>による規制も、ストリップ業界にとっては逆風であり続けている。ストリップ劇場は、同法の定めるところの「性風俗関連特殊営業等」（より厳密には「店舗型性風俗特殊営業」）の中に含まれており、営業時間、営業区域、さらには宣伝のあり方に至るまで、厳しいルールに従わなければならない。また、業界関係者の間では、ストリップ劇場の新設や移転は事実上困難であるといわれている。既存店舗については存続を黙認されていても、新設や移転の場合には、立地場所の適性について改めて許認可が必要になるという。したがって、既存のストリップ劇場が、より集客しやすい場所に移転することは、実質的には困難である。このことも、経営の悪化したストリップ劇場が、移転ではなく廃業を選択する要

因の1つになっている（木村さんへのヒアリングによる）。

上記のような要因により、ピーク時には全国に300軒以上あったストリップ劇場も、現在では20店舗強にまで減少しているという。もはや、団体旅行の男性客のみをターゲットにしているだけで、ストリップ劇場が生き残りを図ることは難しい。こうした問題意識から、木村さんは、新しいタイプのイベントの必要性を強く認識するに至った。そこで、木村さんが最初に相談したのは、公演のためにニュー道後ミュージックを訪れていた踊り子の牧瀬さんであった（木村さんへのヒアリングによる）<sup>16</sup>。

木村さんは、牧瀬さんに、入場者の減少を食い止める新しい取り組みの必要性を訴え、アイデアを求めた。牧瀬さんは、その時点で既に、関東のストリップ劇場でアーティストとのコラボストリップを経験していたため、木村さんに、松山近郊の地元アーティストと協働するイベントを企画してはどうかと提案した（木村さん・牧瀬さんへのヒアリングによる）。

地元住民はえてして観光地の集客施設には立ち寄りたがらない。そうした理由もあって、ニュー道後ミュージックの来場者の中に、地元である松山市民はむしろ少ないという。しかし、理由はそれだけではなく、ピンク街・風俗街周辺のエリアが、地元住民たちにとって足を踏み入れにくい場所になっているからでもある。牧瀬さんは、呼び込むべき「新しい客層」は地元住民であると考えた。地元住民の支持を得るためには、地元のアーティストと協働したイベントの機会を増やすことが望ましい。その種のイベントを積み重ねることで、ニュー道後ミュージック周辺のエリアは決して怖い場所ではないというイメージを、松山市民に広めることもできるかもしれない。こうした問題意識から、牧瀬さんは、自らと地元アーティストとのコラボストリップを提案したという（牧瀬さんへのヒアリングによる）<sup>17</sup>。

ニュー道後ミュージックにおける最初のコラボ

イベントは、広島のパンド「キヲツケロ」とのコラボストリップとして企画された(2013年3月)。その後、牧瀬さんは、松山市および愛媛県を中心に活動するハワイアンバンド「the Blue Lagoon Stompers」<sup>18</sup>と組むことになった。the Blue Lagoon Stompers と牧瀬さんの最初のコラボイベントが、「ALOHA from ニュー道後ミュージック」(2013年5月)である<sup>19</sup>。それ以降、the Blue Lagoon Stompers のメンバーである白石伸吾さんが、イベントの企画や、踊り子とアーティストとの仲介役を務めるようになったという(牧瀬さんへのヒアリングによる)。

白石さんが仲介役を務めるようになってから、地元アーティストとのコラボイベントが徐々に増えていったという。牧瀬さん、白石さん、吉井さんの3人を中心にして結成したユニット「凸凹ランチ」<sup>20</sup>のライブ、また、凸凹ランチが仙九郎さんと一緒に参加した「怪談ストリップ」<sup>21</sup>など、実現可能なことの幅も広がったという。さらに、画家でありダルマ作家でもある富久さんが参加した「body Painting Show!!: いろあらかる」(2014年6月)では、白石さんとその友人のミュージシャンによって奏でられる音楽だけでなく、富久さんによるライブペインティングも披露された。この時、キャンバスになったのは、牧瀬さんの身体であった(牧瀬さん・白石さんへのヒアリングによる)。

### 3-4. ノウハウの蓄積

こうして、コラボイベントの回数を重ねていくうちに、そのためのノウハウも蓄積していくことになった。逆にいえば、コラボストリップを始めたばかりの頃は、そうしたノウハウが蓄積されておらず、試行錯誤を重ねていたという。

たとえば、初期のコラボストリップでは、劇場のスタッフから、辛口のコメントが寄せられた。「やるからには1+1=2以上でなければ意味がないのではないかと、今の状態では2にもなっていないのではないかと」。つまり、協働する2者が、普段、

単独でも実現可能なパフォーマンスを発揮し合うだけでは、いわば「1+1=2」止まりであるというのである。お互いの良いところを引き出すことができなければ、協働する意味は半減してしまう(牧瀬さんへのヒアリングによる)。

上記の点と関わって中ムラさんは、自らも関わるイベント「真夏のエロの夢」において、次の2点を心掛けているという。第1に、ストリップを観覧したことの無い客が劇場に初訪問するきっかけを提供すること、第2に、常連客にいつもと違うものを見せることである(中ムラさんへのヒアリングによる)。

富久さんによれば、踊り子との協働に際しては、割り当てられた時間内でライブペインティングを完結させる必要があるため、気をつかった側面もあるという。その一方で、慣れてくると、生演奏される音楽の抑揚に合わせた方が「オチ」をつけやすいことにも気づいた。つまり、踊り子とライブペインティングの2者よりも、そこにミュージシャンも介在した3者による協働の方が、パフォーマンスを発揮しやすいのである(富久さんへのヒアリングによる)。

ほぼ同様のことを中ムラさんも述べている。コラボストリップにおける各種パフォーマンス(音楽・ダンス・ライブペインティングなど)は、即興でおこなわれることが多い。その際、終わるタイミングを出演者同士で合わせ、「オチ」をつくるのが最も難しいという。さらに、ストリップ劇場における踊り子の多くは、あらかじめ決められた流れで進行することに慣れているため、なおさら、即興を得意とするアーティストとの協働には困難がつきまとう。しかし、わかりやすく「オチ」をつけることのできる音楽が挿入されることによって、出演者全員が終わりのタイミングを見極めやすくなるという。音楽は、コラボストリップにとって、欠かせない要素と考えられる(中ムラさんへの聞き取りによる)。

また、「異色の組み合わせ」を実現できるところも、コラボストリップの魅力であるという。スト



リップには、音楽のリズムに合わせたダンスを前面に押し出すスタイルと、性的行為を連想させる動きを強調するスタイルがあるという。the Blue Lagoon Stompers が得意とするハワイアンミュージックには、通常の場合、フラダンスのようなゆったりしたダンスが適合的であると考えられている。ところが、ある踊り子が、ハワイアンミュージックに合わせて、性的行為を連想させる動きを披露したところ、そのギャップが異様な世界観を生み、観客にとって面白いコラボストリップになったという（中ムラさんへのヒアリングによる）。

ところで、昔からの常連客の中には、ステージの上に踊り子以外の部外者が上がることを快く思わない人もいるという。こうした常連客への配慮も必要である。富久さんは、自分がステージに上がるだけでも快く思わない常連客が存在するにもかかわらず、絵の具でステージを汚すことがあってはならないと考えた。それは、ストリップファンにとっての「聖域」を二重の意味で「汚す」ことになるのである。したがって、舞台上に絵の具を落とさないように気をつけ、それでも落としてしまった絵の具については丁寧に拭き取ったという（富久さんへのヒアリングによる）。

### 3-5. 来場者の変容

上記のような取り組みにより、地元アーティストのファンを中心として、従来、ストリップ劇場には足を踏み入れることのなかった客層が、ニュー道後ミュージックに来場するようになった。コラボストリップ実施時のみならず、平常時の女性客も増えたという（白石さんへのヒアリングによる）。また、心が動かされ、涙を流す女性客も時おり見かけるといふ（牧瀬さんへのヒアリングによる）。「予想していたよりもはるかに美しかった」と感想を述べる男性客もいたそうである（仙九郎さんへのヒアリングによる）。コラボストリップの取り組みは、ストリップ劇場への固定観念を相対化し、新しい客層を呼び込むことに、一定の貢献を果たしているといえよう。

また、コラボストリップの取り組みに対して、当初否定的であったものの、回を重ねるごとに、応援してくれるようになった常連客も存在するという。アーティストと踊り子の距離が近くなるにつれて、アーティストと常連客の間の距離も縮まり、仲間意識が芽生えてきたのではないかと、白石さんは分析している。中には、CD を購入してくれるようになった常連客や、踊り子だけでなくアーティストに対しても、差し入れを持参するようになった常連客も存在するという（白石さんへのヒアリングによる）。

今後の方向性としては、コラボストリップだけでなく昔ながらのストリップショーの魅力も理解する客、さらには、踊り子の生き様に敬意を払ったうえでストリップショーを楽しむことのできる客を増やしていきたいという。たとえば、以前は、ニュー道後ミュージックにも、現役最高齢(当時)の踊り子・若尾光さんが、しばしば出演していた。若い頃負った借金の返済のために、踊り子の道に進んだことが、若尾さんのキャリアの出発点であるという。以来、若尾さんは、数十年にわたって、踊り子の仕事にある種の誇りをもって舞台上がり続けたという（現在は既に引退している）。ニュー道後ミュージックに来場する若い客層には、上記のような意味での踊り子の生き様も含めて理解し、ショーを楽しんでほしいという（白石さん・吉井さんへのヒアリングによる）。

### 3-6. 継続的推進体制の確立

コラボストリップの取り組みそれ自体は、ニュー道後ミュージック以外のストリップ劇場でも実施されている。実際、牧瀬さんは、道後での取り組みに先立って、関東のストリップ劇場においてコラボストリップを経験していた。ニュー道後ミュージックにおける取り組みの特色はどこにあるのであろうか。

牧瀬さんによれば、ニュー道後ミュージックにおけるコラボストリップは、劇場をあげて組織的に実践しているところが画期的であるという。牧

瀬さんが東京でコラボストリップを実践した際には、牧瀬さんの出演する時間帯においてのみ、アーティストとのコラボレーションを披露することができた。コラボストリップに賛同する踊り子が少ない段階では仕方ないことといえるが、このやり方では、他の踊り子との入れ替わりの時間を気にする必要が生じてしまうため、たとえば、やや大きめのセットを用いたコラボレーションを実践することは難しい。表現に制約が生じやすいのである。それに対して、ニュー道後ミュージックは、その日登場する踊り子全員がアーティストとのコラボレーションを実践する、いわばコラボストリップ・デイとでも呼ぶべき取り組みにも積極的である（牧瀬さんへのヒアリングによる）。

上記のようなことが可能になっている理由をさしあたり2つ指摘しておきたい。第1の理由は、コラボストリップという企画が、経営者である木村さんから牧瀬さんに持ちかける形で始まったことと関わる。こうした経緯から考えて、ニュー道後ミュージックの側が、劇場をあげてコラボストリップを推進することには、必然性がある。そして第2の理由は、牧瀬さんと **the Blue Lagoon Stompers** との協働以降、白石さんが、コラボイベントの企画やアーティストのブッキングに主体的に関わるようになったことと関わる。元々は、牧瀬さんの提案から始まったイベントといえるが、白石さんが関わるようになって以降は、牧瀬さんが企画せずともイベントが成立するようになった。こうした体制が確立されることによって、複数の踊り子との交渉や、地元・松山で活動する様々なアーティストとコラボレーションが、容易になった。愛媛在住でない牧瀬さんが、全国各地で自らの公演もこなしながら、複数の踊り子や、愛媛在住アーティストとの交渉を進めていくことは、難しいものと考えられる。白石さんの関与によって、劇場によるコラボストリップの組織的推進が可能になったのみならず、イベントを単発で終わらすことなく継続することが可能になったという（牧瀬さんへのヒアリングによる）。

もっとも、白石さんが、当初からこうした体制の確立を意図していたわけではなさそうである。白石さんによれば、最初のコラボストリップは、「ストリップ劇場でライブなんて楽しそう」という軽い気持ちで誘いにのったという（白石さんへのヒアリングによる）。長年音楽活動を続けてきた白石さんの知り合いには、松山・愛媛のアーティストが多い。白石さんの人的ネットワークを介して、富久さんや中ムラさん、さらには仙九郎さんが、コラボストリップに誘われることになった。なお、富久さんや中ムラさんも、初めてコラボストリップへの誘いを受けた時、ストリップ劇場でのライブパフォーマンスは楽しそうだと考えたという（富久さん・中ムラさんへのヒアリングによる）。実際、中ムラさんの友人の中にも、機会があればストリップ劇場でパフォーマンスを披露してみたいと考えるアーティストは多いという（中ムラさんへのヒアリングによる）。このように、松山ないし愛媛には、ストリップ劇場でのイベントないしパフォーマンスを、忌避するどころか、おもしろがるアーティストが多数存在している<sup>22</sup>。そうしたアーティスト・コミュニティの結节点的ポジションに白石さんが立っていたことの意義も大きい。

上記のように、白石さんがコラボストリップに関わり始めた当初の動機は、ニュー道後ミュージックの存続のためというよりも、むしろ興味本位であった。しかし、イベントの回数を重ねていくうちに、踊り子や、ニュー道後ミュージックの常連客との間につながりができ始め、白石さんの気持ちにも変化が生じた。踊り子や常連客との仲間意識とでも呼ぶべきものが芽生え始め、四国最後のストリップ劇場を後世に残したいと考えるようになった。そのためには、ニュー道後ミュージックを様々な客層の集まる場に進化させていく必要がある。コラボストリップや昔ながらのストリップショーはもちろんであるが、それだけでなく、たとえば映画上映、ベリーダンス、バンドのライブなどのように、より一般的なライブパフォーマ

ンスを発信する場としても併用していく道も、選択肢として検討できるのではないかと、白石さんは考えている（白石さん・吉井さんへのヒアリングによる）。

#### 4. むすびにかえて

本稿の冒頭および第2節では、まちの安寧を脅かす存在として忌避されがちであった歓楽街・ピンク街が、若い世代を中心に再評価されつつあることを指摘し、そのうえで、新たな時代のまちづくりには、猥雑なものを排除するのではなく包摂できるような度量が求められていると提起した。とはいえ、猥雑なものに対する一般的な住民の拒否感はまだなお大きく、そうしたまちづくりを拙速に推進していくことは得策ではない。本稿では、そのための序論的考察として、まず、猥雑なものが再評価されつつある文脈を確認することにした。その際、若い消費者の価値観を変化させてきた要因について検討することも重要ではあるが、本稿においては、成人向け娯楽施設の側の生き残り戦略に着目することも有意義ではないかと考えた。事例として取り上げたのは、四国有数の温泉観光地・道後の老舗ストリップ劇場「ニュー道後ミュージック」である。

第3節では、ニュー道後ミュージックが、新しい客層の開拓のために企画したコラボストリップに着目し、関係者へのヒアリング調査から、その成立の経緯と、イベントを継続可能な運営体制が確立されるプロセスを明らかにした。調査の結果明らかになってきたことは、ニュー道後ミュージックにおいて、ストリップ劇場の将来に危機感を感じている若手経営者と、コラボストリップの経験者である踊り子、さらに、地元アーティスト・コミュニティに人的ネットワークを持つミュージシャンの3者が協力し合うことにより、コラボストリップを継続的に実施できる体制が確立され、結果として、若い女性を含む新しい客層の呼び込みが一定程度達成されている事実である。

本稿のインプリケーションは、次のように整理

できる。

第1に、生き残りを賭けた成人向け娯楽施設の側からの、イメージ転換のための取り組みは、実際に、猥雑なもの・まちへのイメージを多少なりとも好転させる効果を発揮するという点である。

第2に、その際、音楽やアートの力が活用されている点である。音楽やアートには、社会の中で共有されてきたタブーを相対化させる力がある。この点も、新たな客層が、抵抗なくニュー道後ミュージックの敷居を跨ぐことを可能にした要因の1つと考えられる。

第3に、地元アーティストとのコラボイベントを企画したことによって、その地元アーティストのファンがごくごく自然な形でストリップ劇場を訪問するようになったことである。これは、他のストリップ劇場ないしは他のタイプの猥雑なものが、自らの社会的イメージを転換しようと試みる際に、参考になる論点といえよう。

そして第4に、地元アーティスト・コミュニティの結节点的ポジションに立つ白石さんが、コラボイベントの企画やブッキングに関わることによって、イベントを継続的に推進する体制が飛躍的に強化されたことである。ニュー道後ミュージックと同様、存続の危ぶまれているストリップ劇場は、地方都市に多い。ここから、次のような論点も示唆される。他都市のストリップ劇場において、地元アーティストとのコラボイベントを企画するのであれば、地元の音楽シーンないしアートシーン内部でネットワークのノードになるような人物を、仲間に引き込むことが望ましい。

とはいえ、本稿の議論に対しては、様々な観点からの限界も指摘できる。

第1に、資料の制約から、ニュー道後ミュージックにおけるコラボストリップの取り組みを、時系列で、網羅的に整理することができなかった点である。本稿の執筆に際しては、コラボストリップの関係者総勢7名へのヒアリング調査を実施している。これだけの言説を集めながら、コラボス

トリップの取り組みを、年表の形で整理することすらできなかった。ヒアリング結果を補完する資料の収集を怠ってしまったことが原因であると考えられる。

第2に、ニュー道後ミュージックのコラボストリップに出演したことのある地元アーティストは、今回ヒアリングした5人（白石さん・吉井さん・富久さん・中ムラさん・仙九郎さん）の他にも存在する。筆者の知る限りでも、松山で活躍するコンテンポラリーダンサーや、砂絵アーティストが、参加している。彼・彼女らに追加でヒアリングを実施すれば、本稿で抽出したものとは幾分違った論点が抽出された可能性もあろう。

第3に、本稿の議論は、解釈のしよによって、音楽やアートの力を、素朴に称揚しているようにみえる点である。音楽やアートを、ストリップの猥雑性を覆い隠すための手段としてのみ理解していくのであれば、われわれは、アートを用いて猥雑なまちの浄化運動を展開した事例について、批判的に見る資格を喪失することになる。その意味で、音楽やアートは、猥雑なものを浄化するための手段ではなく、猥雑なものに向き合うための手段として位置づける必要がある。音楽やアートに期待したいのは、新しい客層を呼び込むためのゲートウェイとしての側面だけではなく、踊り子の生き様にまで向き合うための仕掛けとしての側面である。こうした論点については、本稿ではまったくといってよいほど展開できていない。

最後に、本稿の議論においては、筆者らの力量のなさが足かせとなり、いくつかの課題について、正面から向き合わずに棚上げせざるをなかった。1つは、若い世代の消費者たちの価値観が変化している要因についてである。また、冒頭で提示した大きな問題意識との兼ね合いからは、むしろ別府や熱海において、まちの猥雑性を活かしたまちづくりがどのようにして成立したのかを、明らかにする必要があった。これらの課題について、稿を改めて検討する必要性を痛感するところである。

付記

本稿は、筆頭著者である西田が、愛媛大学法文学部総合政策学科観光まちづくりコースに提出した2018年度卒業論文『まちづくりにおける猥雑なものの再評価』（西田, 2019）から、第1章（「まちづくりをめぐる議論の変遷と近年の変化」）と第2章（「ニュー道後ミュージックにおける新しい取り組み（第一調査）」）を抜粋し、山口が加筆・修正を施した。ヒアリング調査に協力してくださった全ての方々に、この場を借りて御礼申し上げます。

### 参考文献

- 市木広一郎（2018）『熱海の奇跡——いかにして活気を取り戻したのか』東洋経済新報社。
- 猪爪範子（1992）「湯布院町における観光地形成の過程と展望」『造園雑誌』（日本造園学会）第55巻第5号、367-372頁。
- 梅川智也（2009）「観光振興と観光地づくりの系譜—官から民、そして地域へ—」西村幸夫編著『観光まちづくり——まち自慢からはじまる地域マネジメント』学芸出版社、67-81頁。
- 浦 達夫（2013）「温泉地の活性化」『観光研究論集』（大阪観光大学観光学研究所）第12号、1-10頁。
- NPO 法人 BEPPU PROJECT（2010）『混浴温泉世界——場所とアートの魔術性』河出書房新社。
- 大澤 健・米田誠司（2019）『由布院モデル——地域特性を活かしたイノベーションによる観光戦略』学芸出版社。
- 岡田知弘（2008）「農村リゾートと複合的発展——温泉のまち・由布院を事例に」中村剛治郎編『基本ケースで学ぶ地域経済学』有斐閣、201-218頁。
- 木谷文弘（2004）『由布院の小さな奇跡』新潮社（新潮新書）。
- 小森美紗子・十代田朗・津々見崇（2010）「温泉地の盛衰に関する基礎的研究」『都市計画論文集』（公益社団法人日本都市計画学会）第45巻第3号、409-414頁。

- 笹島秀晃(2011)「アートによる地域再生の今日の様相——横浜市初黄・日ノ出町地区における安全・安心まちづくりと芸術不動産事業に着目して」『ヘスティアとクリオ』(コミュニティ・自治・歴史研究会)第10号、67-84頁。
- 島原万丈(2015)「Prologue」島原万丈編『Sensuous City「官能都市」——身体で経験する都市;センシュアス・シティ・ランキング』HOME'S 総研、4-26頁。
- 寺谷亮司(2003)「松山市の都心盛り場(1)——歓楽街を中心とした地域特性と近年の変化動向」『IRC 調査月報』(いよぎん地域経済研究センター)第185号、22-36頁。
- 中谷健太郎(2006)『由布院に吹く風』岩波書店。
- 西田さき(2019)『まちづくりにおける猥雑なものへの再評価』愛媛大学法文学部総合政策学科観光まちづくりコース2018年度卒業論文(未公開)。
- 野口智弘(2013)『由布院ものがたり——「玉の湯」溝口薫平に聞く』中央公論社(中公文庫)。
- 原 重一(2004)「人間の感動が旅の原点——はじめに『ひと』ありき」日本交通公社編『観光読本』東洋経済新報社、2-12頁。
- 樋口智幸(2012)「風俗店跡をアートの拠点に——官民協働で元違法店舗を借り上げ整備」『日経アーキテクチュア』2012年12月10日号、80-86頁。
- 藤塚吉浩(2017)『ジェントリフィケーション』古今書院。
- 船本真司(2014)「温泉都市熱海の盛衰過程とその要因に関する研究」『立教観光学研究紀要』第16巻第15号、87-88頁。
- 別府市(2012)『文化的景観——別府の湯けむり景観保存計画』別府市。
- 牧田正裕(2010)「地域を磨き、人を磨く、別府八湯のまちづくり——オンパク、混浴温泉世界、そして APU」地方シンクタンク協議会編『グローバル化と地域活性——“観光+α”への取り組み』地方シンクタンク協議会、2-3頁。
- 三浦宏樹(2012)「混浴温泉世界でまちづくり——創造都市を目指す別府の試み」『地域開発』(日本地域開発センター)第579号(2012年12月号)、40-43頁。
- 麦屋弥生(2004)「温泉と温泉観光地」日本交通公社編『観光読本』東洋経済新報社、51-61頁。
- 山出淳也(2018)『BEPPU PROJECT2015-2018』NPO 法人 BEPPU PROJECT。
- 山崎隆之・管裕紀・津々見崇・十代田朗(2010)「近接する競合温泉地におけるイメージ形成プロセスの比較研究——別府・湯布院・黒川温泉を事例として」『日本観光研究学会第25回全国大会論文集』(日本観光研究学会)265-268頁。
- 米田誠司(2009)「80年続くクアオルトへの取り組み——由布院」西村幸夫編著『観光まちづくり——まち自慢からはじまる地域マネジメント』学芸出版社、204-215頁。

#### 雑誌・新聞

「遊楽地への修学旅行は減ったか／熱海、別府」『朝日新聞』1955年4月18日朝刊第7面。

#### ウェブサイト

「『熱海秘宝館』が女性にも人気だって。昭和のラブ遺産をフォトレポート|女子 SPA!」  
(<https://joshi-spa.jp/443490>: 2019年1月7日閲覧)

「女子にもおすすめ!大阪の超ディープ観光スポット「裏難波」|大阪府|LINE トラベル.jp 旅行ガイド」

(<https://www.travel.co.jp/guide/article/25916/>: 2019年1月7日閲覧)

「武蔵小山駅前通り地区第一種市街地再開発事業|東京都都市整備局」

(<http://www.toshiseibi.metro.tokyo.jp/cproject/fie>)

ld/musasikoyama/saikaihatsu9-19.html : 2019年1月22日閲覧)

## ヒアリング調査

木村晃一郎さん(ニュー道後ミュージック経営者)

2018年12月3日(月) 於・飛鳥のれん

白石伸吾さん(the Blue Lagoon Stompers メンバー)

2018年11月15日(木) 於・愛媛大学社会共創学部山口信夫研究室

吉井和美さん(the Blue Lagoon Stompers メンバー)

2018年11月15日(木) 於・愛媛大学社会共創学部山口信夫研究室

牧瀬 茜さん(踊り子<ストリッパー>) 2018年

12月25日(火) 於・ワニとサイ

富久千愛里(画家・ダルマ作家) 2018年12月16

日(金) 於・富久さん宅

中ムラサトコさん(歌手・ボイスパーフォーマー)

2019年1月10日(木) 於・中ムラさん宅

仙九郎さん(民族楽器奏者) 2019年1月21日(月)

於・飛鳥のれん

山出淳也さん(NPO法人 BEPPU PROJECT 代表)

2018年12月6日(木) 於・NPO 法人 BEPPU PROJECT 事務所

<sup>1</sup> もっとも、本文中で示している由布院のまちづくりに対するイメージはやや一面的に過ぎるかもしれない。由布院のまちづくりについて明らかにすることを直接的な目的とするのであれば、リーダーの存在、実践者たちのネットワーク形成、さらには地域内での経済循環の側面にまで踏み込んだ「分厚い記述」が求められるであろう。本稿では、もっぱら紙幅の都合から、そうした作業を割愛している。なお、由布院のまちづくりについてより詳しくは、猪爪(1992)、木谷(2004)、中谷(2006)、岡田(2008)、米田(2009)、野口(2013)、大澤・米田(2019)などを参照のこと。

<sup>2</sup> 「女子にもおすすめ!大阪の超ディープ観光スポット『裏難波』|大阪府|LINE トラベル.jp 旅行ガイド」(<https://www.travel.co.jp/guide/article/25916/>: 2019年1月7日閲覧)

<sup>3</sup> 『熱海秘宝館』が女性にも人気だって。昭和のラブ遺産をフォトレポート|女子SPA!」(<https://joshi-spa.jp/443490>: 2019年1月7日閲覧)

<sup>4</sup> 本稿では、居酒屋、バーといった飲食店に加えて、スナック、ストリップ劇場、風俗店などのような成人向け娯楽店が入り混じるエリアのことを、「猥雑なまち」と、また、そうしたまちの構成要素を「猥雑なもの」とよぶことにする。

<sup>5</sup> 「盛り場」とは、「人間の欲求を充足する施設が集中して立地する地域」(寺谷, 2003: 24 頁)である。また、寺谷(2003: 24-25 頁)は、盛り場を、主たる構成施設に着目して、5つに分類している。すなわち、①商店街・デパート、②食堂・レストラン街、③飲み屋街、④娯楽街、⑤ピンク街の5つである。

<sup>6</sup> 島原(2015: 21-24 頁)によれば、「官能都市」とは、「他者との関係に生きる都市」(関係性)であり、かつ、「五感で感じる都市」(身体性)である。島原は、他者との関係性を、①共同体に帰属している、②匿名性がある、③ロマンスがある、④機会がある、の4つの視点から、また、身体性の側面を、⑤食文化があること、⑥街を感じられること、⑦自然を感じることに、⑧歩けることに、の4つの視点から、明らかにしようとしている。

<sup>7</sup> 「外国人観光客が押し寄せる『難波』『道頓堀』に対し、安くてうまい店がひしめく、大阪で超穴場のディープ観光スポットです。若い店主が盛り上げる店は個性的で楽しく、女性の方にもおすすめ。『裏なんば』を歩いてみませんか?」(「女子にもおすすめ!大阪の超ディープ観光スポット『裏難波』|大阪府|LINE トラベル.jp 旅行ガイド」

[<https://www.travel.co.jp/guide/article/25916/>: 2019年1月7日閲覧])

<sup>8</sup> 『熱海秘宝館』が女性にも人気だって。昭和のラブ遺産をフォトレポート|女子SPA!」

(<https://joshi-spa.jp/443490>: 2019年1月7日閲覧)

<sup>9</sup> 熱海でおもしろい活動をしている人や地域の課題を取材し発信する取り組みである。

<sup>10</sup> 耕作放棄地を農業体験の場として活用する取り組み等を実施している団体である。2007年に設立され、約20人程度が在籍しているという。

<sup>11</sup> ただし、このイベントは2011年で一旦終了している。

<sup>12</sup> 「武蔵小山駅前通り地区第一種市街地再開発事業|東京都都市整備局」

(<http://www.toshiseibi.metro.tokyo.jp/cpproject/field/musasikoyama/saikaihatsu9-19.html>: 2019年1月22日閲覧)

<sup>13</sup> 「ジェントリフィケーション」とは、都市において、再開発などの理由により労働者階級から中間階級への居住者階層の上方変動がおこる現象のことである(藤塚, 2017: 1-2 頁)。また、こうした

上方変動の過程で、社会的弱者を排除する浄化運動が顕在化することも少なくない。

<sup>14</sup> 基本的には、1回目は17:00から、2回目は18:50から、3回目は20:40から、4回目は22:30から上演しているという（木村さんへのヒアリングによる）。

<sup>15</sup> 善良の風俗と清浄な風俗環境を保持し、少年の健全な育成に障害を及ぼす行為を防止するための法律であり、風俗営業と性風俗関連特殊営業等について、営業時間や営業区域を制限する法律である（同法第1条）。

<sup>16</sup> なお、こうした問題意識それ自体は、少なからぬ業界関係者に認識されているものの、それを実践に移す動きは大きくなってこなかった。要因として考えられるのは、多くのストリップ劇場において経営者が高齢化していることである。ニュー道後ミュージックの場合、まだ40代と若く、バイタリティと人的ネットワークも保有している木村さんが社長であったからこそ、新しい取り組みにチャレンジすることができた可能性が高いという（白石さんへのヒアリングによる）。

<sup>17</sup> ただし、ニュー道後ミュージックのある常連客が、踊り子とアーティストとのコラボイベントを提案したことがきっかけであるとの証言もある（仙九郎さんへのヒアリングによる）。

<sup>18</sup> 正式メンバーは、白石さんと吉井さんに、藤本健次さん（ギター・ベース・ウクレレ・ボーカルを担当）と前田絵麻さん（パーカッション・ギター・ウクレレ・ボーカルを担当）を加えた4人である。

<sup>19</sup> ただし、諸事情あり、このイベントに参加したのは、the Blue Lagoon Stompersのバンドメンバー全員ではなく、選抜メンバーであったという。

<sup>20</sup> 牧瀬茜さん、白石伸吾さん、吉井和美さんの3人で2013年に結成されたユニットであり、イベントによってメンバー数を柔軟に変動させているという。

<sup>21</sup> 木村さんの提案で2007年から始まった、怪談をテーマとしたストリップショーである。セリフがあるものもあれば、小物などを使いながら動きだけで表現するスタイルもある（木村さん・仙九郎さんへの聞き取りによる）。

<sup>22</sup> 富久さんにいたっては、コラボストリップに関わることになる10年以上前に、好奇心で道後ミュージックを観覧したことがある。そのため、ストリップ劇場に自ら入場することになる抵抗感はまったくなかったという。また、画家の知人に依頼されてヌードモデルを引き受けたこともあり、女性の身体をアートの視点で見ることへの抵抗感も

なかった。したがって、イベントで女性の身体にペイントすることにも、やはり抵抗感はなく、むしろおもしろそうだったという（富久さんへのヒアリングによる）。